

地方部における交流活動と地域活力*

Human Interaction for Regional Revitalization in Rural Areas *

今洋佑**・家田仁***・鳩山紀一郎****

By Yosuke KON**・Hitoshi IEDA***・Kiichiro HATOYAMA****

1. はじめに

わが国の総人口は減少し始め、地方部においては住民の減少により多くの地域が維持困難になることが予想されるため、地方部における地域の維持、とりわけ域内経済の維持・活性化は急務であると考えられる。

これまでの地域活性化方策は、地域資源の活用やイベントの開催、街並みの整備など、地域の魅力を向上させ、外部の人々を多くひきつけるという、いわば「モノによるアプローチ」の取り組みが中心であった。しかし、人口減少下において、このアプローチには限界がある。

そこで本研究では、地域内外の人々の交流活動を通じた「ヒトによるアプローチ」こそが地域の維持・活性化の原動力であると考え、地域内のみならず地域外の人々にも地域への愛着を持ってもらえれば、地域内のみならず地域外の人々の力も活用でき、域内人口が減少したとしても域内経済活動を維持・活性化できると考える。ここで、交流活動を通じて地域に愛着を持ち、その地域のために活動或いは経済的貢献を行うようになった地域外の人々を、本研究では「汎住民」と呼ぶ。「汎住民」は地域の外部に住んでいながらも、その他の人々に地域のことを紹介したり、自分が職業上得たノウハウを活用して地域に貢献したりする可能性がある。本研究では、このような「汎住民」の増加が、擬似的に地域の経済圏を拡大し、域内経済を維持・活性化させるものと考えられる。

加えて本研究では、「汎住民」を生み出すのに必要な地域の人的資源の集団的特性として、連帯性・多様性・開放性の3つを要素とした地域の「交流力」を提案する。具体的には、地域リーダーたちが活動を起こすための「リーダー達の活動力」¹⁾と、地域活動を継続・発展させ、交流活動を拡大させる地域の素地としての「地域住

*キーワード：地域計画、市民参加、観光・余暇

**正員、工修、内閣府男女共同参画局総務課

(東京都千代田区永田町1-6-1、
TEL03-5253-2111(代表)、FAX03-3581-0210)

***フェロー会員、工博、東京大学工学部社会基盤学科

(東京都文京区7-3-1、TEL03-5841-6117)

****正員、工博、東京大学工学部社会基盤学科

(東京都文京区7-3-1、TEL03-5841-6135)

民の交流力」²⁾の2つに着目する。これらの要素を導出し、交流活動との相互関係を把握することができれば、「汎住民」概念を活用した新しい地域維持・活性化方策の提案が可能となるものと考えられる。

以上より、本研究では、地方部における交流活動に着目し、地域の人的資源の集団的特性との関係を定性的及び定量的に明らかにすることを目的とした。

2. 地域活力発生メカニズムに関する仮説

前述のとおり本研究では、交流活動が「汎住民」を生み出すためには、連帯性・多様性・開放性を3要素とした地域の「交流力」が必要であり、これは具体的には、「リーダー達の活動力」と「地域住民の交流力」に分けることができるものと考えている。いずれも地域において交流活動が発生・拡大するための地域の素地といえる。

(1) リーダー達の活動力

地域活動を行うにあたっては、活動に主導的な役割を果たし、住民を引っ張るリーダーの存在が必要である。ここで「リーダー達の活動力」とは、以下のような3要素によって表現できるものと考えられる。

a) 連帯性：「リーダー間のつながりの強さ」

地域内のリーダー達がどの程度お互いに気脈を通じ合い、協力・交流をしているかを表す。

b) 多様性：「職業・出身・年齢などの多様さ」

地域内のリーダー達がどの程度多様な属性・バックグラウンドを持っているかを表す。

c) 開放性：「外部のリーダーとのつながり易さ」

リーダーが地域外のリーダーや活動のノウハウを持った人間と、どの程度つながりを持っているかを表す。

(2) 地域住民の交流力

交流活動や地域活動は地域住民の広い参加があって初めて地域活力を生み出すものである。そのため、地域に住む一般住民にも、以下のような3要素によって表現される集団的特性を持っている必要があるものと考えられる。

a) 連帯性：「地域住民のまとまりの強さ」

地域住民が個人的にどの程度結びつきが強いのか、地域

コミュニティがどの程度強固か、また住民がどの程度地元への愛着が強いかを表す。地域がまとまっていれば、地域活動やそれを主導するリーダーを支える基盤となり、住民の意識が同じ方向を向きやすいことから、きっかけがあれば新たな活動を生む可能性も高まると考える。

b) 多様性：「職業・出身・年齢などの多様さ」

地域住民がどの程度多様な属性を保持しているかを表す。住民が多様であれば多様な活動が生まれやすくなるとともに、多様な地域活動を住民が敬遠せずに受け入れることが可能になると考える。

c) 開放性：「外来者への心理的障壁の低さ」

外来者を地域住民がどの程度心理的に受け入れるのかを表す。これにより交流活動が生じやすくなり、二地域居住や移住の際のハードルの低くなる、外部からのアドバイスやリーダーを受け入れやすくなるものとする。

これらをまとめたものを本研究では地域活力発生メカニズムに関する仮説（図 - 1）と呼ぶ。以下ではこの仮説に基づき、特に「地域住民の交流力」に関して計測し、また交流量や地域活力との関係を見る。また、地域ごとの交流力の差異の要因についての考察も行う。

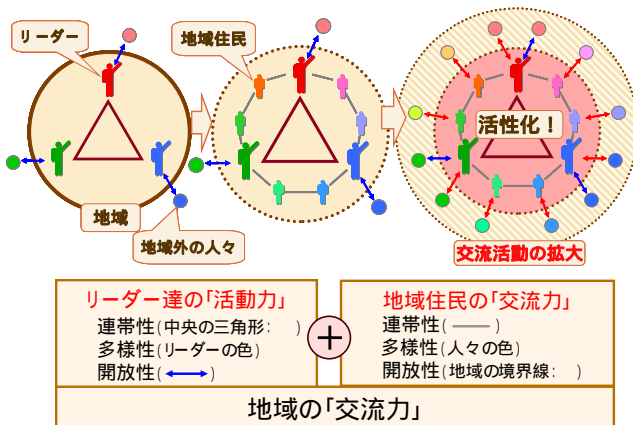


図 - 1 地域活力発生メカニズムに関する仮説

3. 現地調査の実施

06年11月から07年1月にかけて、山形県の6つの地域において、各地域のリーダーへのインタビュー調査と各地域住民へのアンケート調査の二つを行った。調査対象地域の概要を表 - 1 に示す。

表 - 1 6地域での調査詳細

	旧朝日村	最上町	金山町	戸沢村	川西町	高島町
人口	6,000人	11,500人	7,000人	6,000人	19,000人	26,500人
特色	湯殿山/月山参拝道	温泉奥のほそ道	地元杉での街並統一	大学と連携国際交流	地区NPO化	有機農業都会移住者
インタビュー数	4人	9人	8人	6人	7人	4人
アンケート						
配布世帯数	約200	約220人	138	197	約200	実施せず
有効回答数	73	160	70	127	188	

以下にその内容と結果について述べる。

a) 各地域のリーダーへのインタビュー調査

各地域において、地域のリーダー（地域活動において

主導的な役割を担う方々）及び各町村の地域活動担当職員を対象に、インタビュー調査を行った。インタビュー調査では、交流活動の実態とその効果、地域活動におけるリーダーの役割（リーダー達の活動力）、地域住民の地域活動への貢献の実態、の三点を把握することを目的とした。結果として、以下の点が得られ、いずれも前述の仮説と整合的であることがわかった。

活動を長期間継続させることが重要。

リーダーと行政、住民間の協力が不可欠。

「外の目」が地域に新しい視点をもたらす効果を持つ。

カリスマリーダーよりもリーダー同士の協力が重要。

リーダーの多様性や、外の人とのつながりが有効。

b) 各地域住民へのアンケート調査

インタビュー調査を行った地域のうち、高島町を除く5地域で住民を対象にアンケート調査を行った。調査の狙いは、住民が交流している「汎住民」の人数（交流量）、住民が地域に対して抱くイメージ評価、住民が想起する地域の「アイデンティティ」、住民の個人属性、の4点の把握である。それぞれ以下のとおり計測を行った。

住民が交流している「汎住民」の人数（交流量）

住民一人ひとりが一年以内に交流を行った地域外の住民数を概数で答えてもらう形で計測した。

住民が地域に対して抱くイメージ評価

全32個の質問に対して5段階のリッカート尺度を用いて、直感的に答えてもらうことにした。質問項目は、それぞれが「地域住民の交流力」における連帯性・開放性或いは地域活力に関連するように設計した。これらは、因子分析によって数値化を試みた。

住民が想起する地域の「アイデンティティ」

その地域において自分が自慢できるものを自由回答で挙げてもらった。

住民の個人属性

地域住民の多様性を測定するため、職業や出身、年齢を始めとする個人属性についても詳細に聞くことにした。

4. アンケート調査から得た各指標の全体的分析

(1) 平均交流量の算出

前述の質問を基に、各地域における交流量の平均値を測定すると、図 - 2 に示す結果が得られた。各地域において、一定の交流量が認められたが、その中でも金山町の交流量が著しく多く、山岳信仰参拝道や温泉など顕著な地域資源を有していると見られる旧朝日村や最上町よりも交流量があることが確認された。

(2) 「地域住民の交流力」及び「地域活力」の算出

「住民が地域に対して抱くイメージ評価」の質問項目

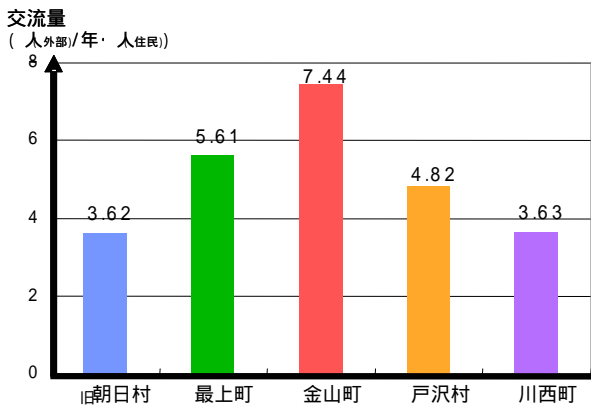


図 - 2 各地域の交流量

表 - 2 因子分析結果

名前	因子			
	連帯性	開放性	地域活動実感性	経済基盤実感性
固有値	6.417	5.427	5.595	4.661
問題発生の際多くの住民が結束する傾向がある	0.656	-0.008	0.039	0.024
多くの住民が地域に愛着を抱いている	0.644	-0.02	-0.052	0.105
近所つきあいがあるに行われている	0.581	-0.087	0.035	0.055
「人情味」がある住民が多い	0.56	-0.189	0.04	0.025
お年寄りや若者のふれあいが盛んである	0.489	-0.142	-0.067	0.2
地域維持のため住民が前向きに取り組んでいる	0.452	-0.215	-0.158	-0.032
近隣のほかの地域よりも住みよい	0.346	-0.081	-0.126	0.228
町内会活動が活発である	0.332	-0.1	-0.4	0.109
地域を引っ張るリーダー的存在の住民が多い	0.324	-0.197	-0.273	-0.074
地元住民と移住者の間に一体感がある	0.034	-0.75	-0.005	-0.086
地域の外の人々が溶け込みやすい	0.109	-0.694	0.075	0.047
住民に転入者が来ることを望む傾向がある	-0.099	-0.68	-0.028	-0.068
転入者にとってなじみやすい	0.178	-0.679	-0.006	-0.015
住民に観光客を歓迎する雰囲気がある	0.026	-0.495	-0.036	0.157
住民主催のイベントが多く開催される	0.1	0.011	-0.936	-0.221
イベントで寄付がよく集まる	-0.035	-0.081	-0.609	0.131
スポーツ活動が盛んである	0.045	-0.057	-0.512	0.248
お祭りがよく盛り上がる	0.211	-0.063	-0.41	0.226
他の地域の人々に自慢できる地域である	0.297	-0.038	-0.325	0.27
出張で来る人が多い	-0.193	-0.127	-0.221	0.582
観光地として人気がある	-0.053	-0.137	-0.172	0.559
経済的に生活の余裕がある	-0.02	-0.036	-0.188	0.412
役所・役場の職員への対応の評判がいい	0.216	-0.039	-0.064	0.38
地元で就職したい人が多い	0.152	0.036	0.007	0.377
地域内に親戚を持つ住民が多い	-0.063	-0.054	-0.012	0.24
長くこの地域に住んでいる住民が多い	0.176	-0.067	0.007	-0.076
地形的に生活に不便な環境である	-0.068	-0.028	0.077	-0.154
子供の遊び場が多い	0.21	-0.012	-0.115	0.281
地元高校への進学が盛んである	0.232	-0.025	-0.042	0.272
住民がライバル視している地域がある	-0.079	-0.002	-0.297	0.105
生活するうえで厳しい気候である	-0.024	0.101	-0.014	-0.093

を基に因子分析を行った結果を表 - 2 に示す。

第 1 因子は住民の結束やまとまり、愛着に関する質問項目が多いため、これは地域住民の「連帯性」と考えられる。第 2 因子は外の人々の馴染みややすさや溶け込みやすさを表す項目が多いため、地域住民の「開放性」と考えられる。そして、これら 2 つの因子の因子得点を地域ごとに計算すれば、地域の連帯性、開放性指標が得られるものと考えた。

一方、地域住民の多様性については、得られた個人属性をもとに、居住年数の標準偏差から導出した変動係数 (= 標準偏差/平均) を指標として用いることにした。

表 - 2 の第 3・第 4 因子は、地域活動・交流活動によってもたらされた地域活力の主観的観測数値であると考えられる。そのため、まず第 3 因子はイベントやお祭りなどの地域活動に関する項目が多いことから、これを「地域活動実感性」、第 4 因子は観光地、出張、就職や経済的余裕などの経済活動についての質問が多いことから、これを「経済活動実感性」と呼び、それぞれ主観的な地域活力を表すものと考え、地域ごとに数値化した。

以上の指標を地域ごとにまとめたのが表 - 3 である。

表 - 3 地域ごとの各指標

	旧朝日村	最上町	金山町	戸沢村	川西町
交流量	3.62	5.61	7.44	4.82	3.63
開放性	-0.31	-0.02	0.17	0.10	0.00
連帯性	0.10	-0.12	0.25	0.15	-0.13
多様性	-0.15	0.23	-0.12	0.14	-0.11
地域活動実感性	-0.04	0.24	0.37	-0.01	-0.32
経済活動実感性	0.15	0.24	0.55	0.13	-0.56

(3) 交流量と「地域住民の交流力」との関係

地域ごとの交流量を被説明変数、「連帯性」「多様性」「開放性」の指標を説明変数として重回帰分析を行った。その結果が図 - 3 である。「地域住民の交流力」は連帯性・開放性・多様性の総合指標で、「 $3.9 \times$ 連帯性 + $1.8 \times$ 開放性 + $4.6 \times$ 多様性」で表わされる。

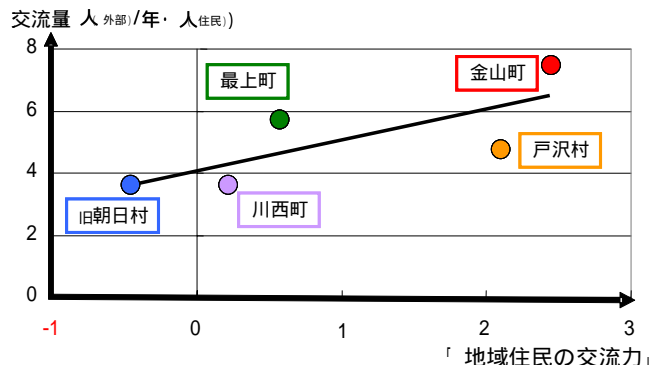


図 - 3 交流量と「地域住民の交流力」の関係

結果、交流量と「地域住民の交流力」の間にある程度相関があることが明らかになり、2 つの指標に因果性が存在する可能性が示唆された。従って、「交流力」を総合的に高めることにより、交流活動を増加させることが出来る可能性はあると考えられ、地域活力向上メカニズムに関する仮説はある程度妥当と考えることができる。

(4) 交流量と主観的な地域活力との関係

同様に、交流量と 2 つの主観的な地域活力の間においてもそれぞれ相関を分析した(図 - 4、図 - 5)ところ、いずれも高い正の相関を持つという結果となり、ここにもある程度の因果性があることが示唆された。この結果も、交流量の増加が地域活力を生み出すという本研究の仮説と整合的なものである。

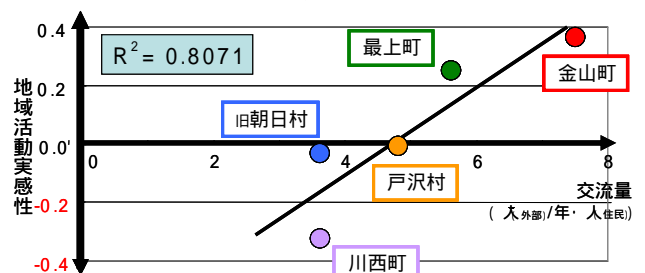


図 - 4 交流量と地域活動実感性の関係

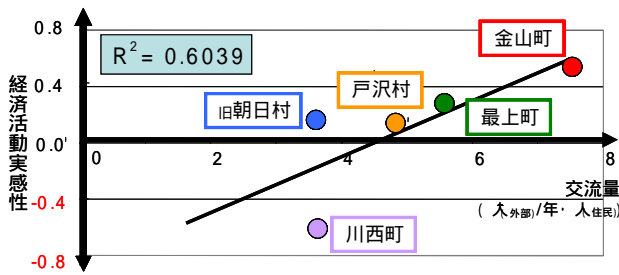


図 - 5 交流量と経済活動実感性の関係

6. 各地域についての考察

以上より、交流量と「地域の交流力」及び主観的な地域活力について全体的な傾向が明らかとなった。ここでは更に、地域ごとの「地域住民の交流力」と交流量の実態はどのような要因で説明されるか、今後各地域はどのように地域活動を行っていくべきか、の2点について考察する。考察はアンケート調査を実施した5地域のうち、顕著な地域資源を有している旧朝日町と最上町を除く3地域について行うことにする。

(1) 金山町

金山町は地域活性化の優良事例であるといわれており、本研究で求めた指標も殆どが高い値を示している。顕著な地域資源はないが、連帯性を基に地域活動を長期間続けることで活発な交流活動を生み出すことに成功した。

具体的には、山に囲まれた地形や、合併を行わない独立の気風があることに加え、地区自治(1969年～)や街並み整備(1978年～)など、地域活動を長期間継続していること、そして町長の長期安定政権(1947年から4人のみ)が政策の一貫性を担保してきたこと、などが連帯性の向上に貢献したものと考えられる。

一方、金山町では多様性はあまり高くない。これは地域住民が観光客や移住者を必ずしも求めておらず、あくまで「汎住民」として協力してもらいたい、という姿勢が影響しているものと考えられる。

従って、将来的には、連帯性を生かして地域活動を継続させることで、住民は増加せずとも多くの「汎住民」を獲得し、地域の活力を維持する方向性が望ましいと予想される。そしてそのためにも、現在の評価を維持し、「オンリーワン」の自信・自負を持ち続けることが肝要だと考えられる。

(2) 戸沢村

戸沢村は顕著な地域資源が無いながらも、同じ山村である旧朝日村と比して多くの交流量を有している。その要因を「地域住民の交流力」から考察する。

戸沢村には明治にいたるまでの最上川舟運による交流の歴史があった。加えて、大飢饉時(近代では1934年)に移住者を受け入れてきた経緯や韓国を中心とした国際

交流活動の実績(1989年～)などが重なり、開放性・多様性が高位となったものと予想される。これが交流量の多さを示す要因の一つであろう。

戸沢村では現在、教育を生かした地域活動と国際交流を積極的に推進しており、外部から来たリーダーと地域のリーダーとがうまく連携しているようである。地域住民には活動を通じた生きがい、地元への愛着の醸成も垣間見える。従って、金山町とは異なり開放性からのアプローチであるが、地域活動を長期間続けることができれば、地域活性化の優良事例となり得る地域といえよう。

(3) 川西町

川西町は交流量が他の地域に比して少なく、特に連帯性は他と比べて低位にとどまっている。その理由としては、合併前の名残で町全体でまとまる意識が薄いこと、山村と比べ農業生産が容易でコミュニティ依存が相対的に低いこと、などが考えられる。

現在川西町では、地区のNPO化計画・地区ごとの公民館を中心にしたまちづくりが行われており、外部から人を呼ぶのではなく、地域の問題から取り組むことで連帯性を向上させようという動きが見られる。このように地区ごとの活動は盛んになりつつあるので、これからは行政も巻き込んだ町単位の視点が望まれることになるだろう。

7. まとめ

本研究では、地域活力発生メカニズムに関する仮説に基づき、山形県下6地域でのインタビュー調査およびアンケート調査を行い、以下の2点の総合的な結果を得た。

「連帯性」「多様性」「開放性」の3つからなる「地域住民の交流力」と交流量との間には正の相関が見られ、「地域住民の交流力」向上が交流活動を増加しうることを示唆した。

交流量と主観的な地域活力の間にも正の相関があり、交流活動が地域活力向上の手段となる可能性を示唆した。

また、各地域の詳細な考察から、仮に地域に顕著な地域資源がなくても、長期間地域活動を継続し続けることが、地域の「交流力」及び「汎住民」を増加させ、地域活力が向上しうる可能性が示唆された。

今後の課題としては、地域の「交流力」の客観的データに基づく導出や、交流量のより客観的・緻密な測定等が挙げられる。

参考文献

- 1) 佐藤・山本・広田：「参加型地域作りへの一般住民の参加の質に関する調査研究」農村計画論文集第3集 2001
- 2) 斎尾・長尾・藍澤：「農村地域における住民の『集落外への外向きの姿勢』と『都市住民との交流効果』との関連」農村計画論文集第3集 2001